

I : 宗教現象としてのキリスト教

<前回> 意味の問いとしての宗教

現代宗教学 → 宗教現象モデルと宗教概念

1. これまでの議論

- ・課題：宗教現象の多様性と流動性を分析する
- ・現代宗教学の前提（現代宗教学の科学性）
 - 「仮説と検証」：仮説 → データ収集 → 記述・整理 → 分析・理論化
 - 検証・仮説の修正
- ・仮説1 = 宗教現象のモデル化（多様な現象へのアプローチするための仮説的モデル）
 - ・4次元モデル：構造／プロセス／レベル／深度
 - ・宗教現象の基本構造（「S-M-O」モデル）
 - 「SはMにおいて／Mを通してOを信じる」

2. 意味の問いとしての宗教

- ・宗教の概念規定の意義：歴史的経緯と最近の動向、概念規定の必要性
- ・「人間は意味に固執する存在である」＋「人間は本質的に宗教的である」
- ・人間存在と意味世界：生物学的条件（意味世界構築の必要性、哲学的人間学）、シンボルを操る能力（構想力）と知識社会学、意味世界の無根拠性と根拠付け機能のシステムへの組み入れ、意味世界の根拠付け機能の担い手としての宗教
- ・仮説2 = 宗教概念：広義と狭義の宗教概念

狭義：制度的な既存宗教（歴史的常識的）	名詞
広義：「宗教的な」もの → 意味世界の根拠づけ機能	形容詞

第3講：信仰と自己同一性

1 信仰と宗教現象学

1. 信仰という問題へのアプローチ

宗教的信仰を説明するのは、簡単ではない。宗教的信仰を持っている人には、あまりに自明であり、宗教的信仰を持っていない人には、まったくつかみ所のない問題だから。まさに、いかに説明するかが問われねばならない。

↓

本講義では、「宗教現象学」のアプローチを採用する。

宗教現象学では、対象への価値判断を一端括弧に入れて、現象を記述することが試みられるが、これは、「宗教」「信仰」へのアプローチとして優れた方法である。

第1講では、現代宗教学の前提として、価値中立性を挙げたが、宗教現象学はその前提に合致している。「宗教は迷信的である」（価値判断）とか、「神は存在しない」（存在判断）とかいった先入観を持ちこまずに、信仰現象へアプローチするこ

とができる。現代宗教学では、特定宗教の真理性とか、神・霊界の实在とか、いった議論は、少なくとも研究のスタートにおいては持ちこまない。

2. 「多様な現象の記述（判断停止・エポケー）→類型化→基本構造・基本要素の分析」が宗教現象学のカバーする領域である。
3. 以下においては、宗教現象の構造モデルの「S→」（信仰）に関する古典的な宗教現象学的研究を紹介することによって、「信仰」の理解を深めてみたい。しかし、時間的に、「2」の手順を逐一実行することは困難であるので、具体的には、次の方針によって議論が進められる。
 - (1) 「既知→未知」：宗教的信仰についてはほとんど実体験の無い人を受講者として想定し、説明を行う。その際に、そういった人にも「既知」であると期待できるような事例（「愛」という現象）を使って、それとの類比によって、「未知」なる信仰現象へと接近する。
 - (2) 「理想化」：始めから複雑な事例——現実の信仰はかなり複雑である——を扱うのではなく、純粋な典型例に限定して考える。
 - (3) 「概念化」：説明を集約するために、適切な概念化を目ざす。具体的には、「究極的関心」（ultimate concern）を用いる。
4. 宗教現象学の方法論的基礎については、フッサールの哲学的現象学との関わりが問題となる。しかし、両者の関係をあまり強く考えすぎると、宗教現象学の実態を理解し損なう恐れがある。そもそも、フッサールの現象学が宗教現象に、どのように、どの程度適応できるかは、それ自体問題である。

2 信仰の現象学と究極的関心

1. 古典的な議論として、ティリッヒの「信仰の現象学」を参照する。
2. キリスト教信仰の典型：

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マルコ 12:30） → 旧約聖書に遡る有名な言葉
3. 「心・精神・思い・力」とは？ 原語（ギリシャ語）に戻して考える。
 - ・「思い」（ディアノイア）：認識機能に代表される知性の働き
 - ・「精神」（プシュケー）：生命原理としての魂
 - ・「力」（イスキュース）：「愛する」に関わる力ということから考えて、意志の力。以上から、「思い・精神・力」は、「情・知・意」と言われる精神の基本機能に対応することがわかる。これに対して、「心」（カルディア）は、精神機能の中心、諸機能を統合する働きであり、それによって、知・情・意は、相互に緊張関係にありつつも、分裂に陥ることなく結びつかられ、人格的統合が可能になる。

↓

「信仰」とは、知情意すべてを含んだ全人格的な現象である。まさに、他者を愛するとはこのような仕組みになっている。

↓

「知情意すべてを含んだ全人格的な現象」の基本構造を「関心」（concern）という用語で概念化する。関心は、現象学において精神の基本構造とされる「志向性」（intentio /

intentum、noesis / noema) であり、ハイデッガーの「Sorge」に対応する。これは、コミットメント、コミットすると言い換えてもよい。

4. 「3」は宗教的信仰と世俗的な（日常的な）信頼との共通構造である。それに対して、宗教的信仰の独自性は、「尽くして」において、指示される。

「……を尽くして」は、関心対象への関わり・コミットメントが、全体性あるいは絶対性（→「究極性」）という質を帯びることを示している。これは、日常的コミットメントの相対的、部分的、予備的な性格に対して対照的である。

前回の講義で引用したルターの言い方を用いれば、「全心」。

日常的コミットメントと宗教的コミットメントの間には、漸近的接近と質的飛躍の二面的な繋がりが見られる。数学的な類比を使うならば、宗教的コミットメントは日常的コミットメントの「極限值」に相当すると言える（→ 数学と神学とは論理性において、類似している！）。

第5講での、「聖なるもの」の議論を参照。

聖と俗の関係は、連続性と非連続性の二面性を有する。

Q：宗教的関心と日常的関心との関係について、別の説明を工夫せよ。

5. 以上より、宗教的信仰とは、「究極的関心」と概念化されることになる。

しかし、議論はこれで終わりではない。

6. 「あなたの神である主」における「あなたの」の意味。

信仰対象としての「神」（狭義の宗教の神だけでなく、金、名誉、友情、家族、国家などをも含めた広義の神）は、神一般（一般論における抽象的な神）ではなく、「わたしが」あるいは「あなたが」現にコミットしている神である。→ 神関係は実存的である。

7. この点を、信仰対象と自己同一性との相関として説明することができる。

8. 日々行っている様々な諸行為に対して、「あなたは何者か」と問われた場合、どのように答えることができるだろうか。自己同一性の問いに対する答え方には、次に二つの方向性が考えられる。

(1) 行為の目的の方向で

様々な行為における諸目的の存在と、諸目的の持つ予備的（相対的で部分的）な性格。諸目的の連関（目的連関）についての問いはいくらでも繰り返すことが可能であって（Aの行為の目的はB。では、Bは何のためか）、もし、「何のためか」に最終的に答えようとするならば、諸行為の最終的な目的（「結局、何のためか」）を問わざるを得なくなる。これは、究極的関心の対象（信仰対象）に他ならない。

「神」が顕わな仕方で問題化するのは、この地点においてである。

(2) 行為する主体の方向で

日常的な諸行為に関しては、それを行う主体の役割という観点からも答えることができる。勉強するのは学生だから、会社に行くのは父親だから、戦争するのは国民だから（？）などなど。しかし、「役割」は相対的である（役割は相互に対立しうるし、交換可能である）。「役割」のレベルでは、他者とは交換不可能な突き詰

めた自分（かけがえのない自己）は現れてこない。様々な役割相互の対立の中で分裂に陥らないためには、他者と交換不可能な「自己」「私」が成立しなければならない（先に見た「心」。ただし、この自己や心を実体化することは必ずしも必要ない）。様々な行為を統合する主体性を可能にする「自己同一性」である。

(3) 信仰対象と自己同一性の相関構造

行為説明の二つの方向（目的の方向／主体の方向）は、一見すると正反対のように思われるかもしれないが、実は、相関関係にある。自己同一性の問い（あなたは何者か）には、わたしの究極的関心（広義の宗教の「神」、「わたしの神」）は「…」である、と答えることができる。

前回の講義で、「人間は本質的に宗教的である」と述べたことは、この自己同一性と「神」の相関関係の問題であると説明し直すことができる。

9. 「宗教は日常性の無限の延長線上にある（極限值）」とは、宗教的信仰は、自己同一性の問いが深刻に問われる地点（限界状況）で、もっと鮮明に仕方で顕わになる、と言いつ換えることができる。

10. まとめ：

信仰は、人間の人格の全体性において現象する究極的関心であり、信仰者の自己同一性を規定している。

<愛の問題>

- ・ 神への愛（信仰）と隣人愛の相互連関

この点に注意しつつ、下に引用する「ヨハネ第一の手紙」（Iヨハネ）を分析せよ。

- ・ 宗教によって、「愛」の評価は大きく異なる。→ 比較宗教研究
仏教：愛とは、執着である。

< Iヨハネ >

4:15 イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。17 こうして、愛がわたしたちの内にとどまれているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。18 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。19 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。21 神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

<参考文献>

1. ティリッヒ『信仰の本質と動態』新教出版社（あるいは、白水社刊の『ティリッヒ著作集』第6巻の「信仰の本質と変化」）

Paul Tillich, Dynamics of Faith, in: *Paul Tillich. Main Works / Hauptwerke* Vol.5, De Gruyter 1988.

2. 芦名定道 『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版
『宗教学のエッセンス』北樹出版
「キリスト教信仰と宗教言語」(『哲学研究』第 568 号、京都哲学会、
1999 年、44-76 頁)